沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№19, pp. 81－94. 2026

琉球藍の研究報告・二題
― 聞き取りによる昭和初期の本部町伊豆味の製藍業に関する報告及び琉球藍関連年表作成の試み ―

大湾 ゆかり [1)]

Two titles of research report on Ryukyu indigo
－Report on indigo production of Izumi village in Motobu in the early Showa period by interview and a trial work of writing the chronology related to Ryukyu indigo dye

Yukari OWAN [1)]

はじめに

沖縄の代表的な藍染料である「琉球藍」に関する研究では、伝統的な染織物に用いられることから染色技術について論じられることが多い。また最近では、琉球藍を染料化する、いわゆる製藍技術についても科学分析等によるなどして、発酵にかかる微生物の関与や染液のアルカリ度の関係等の研究がなされている。その中で、筆者が最も関心があるのは、琉球藍の製藍を生業としていた人びとの営みと、技術伝承の歴史的背景を明らかにすることである。このテーマに取り組み始めたきっかけは、沖縄島北部山中に残る藍壺の遺構との出会いで、それらの分布調査を通じて明治から昭和時代の初期まで、北部山林を開墾して移り住んだ人びとが、換金作物として盛んに「山藍」の栽培に着手し、「泥藍」[1]を製造して生活を支えてきたことを学んだからである。

1990年代に筆者は藍壺の分布調査のため山中を歩き、近隣の集落で多くの方々からお話を聞いた。しかし、肝心の琉球藍生産の中心地である本部町伊豆味での聞き取り調査は不十分であり、伊豆味の製藍業については調査不足を感じていた。

そのような中で、琉球藍製造技術保存会（以下「保存会」）から声をかけていただき、大正15年に伊豆味の藍作農家にお生まれになり、昭和23年まで伊豆味で生活されていた太田康子氏（以下「康子氏」という）のお話を伺う機会を得た。康子氏は、伊豆味での生活も藍づくりのことも鮮明に覚えておられて、お話の内容も詳細にわたり明確である。そこで、本稿の第一章では、康子氏の証言をもとに、昭和初期から戦後すぐまでの伊豆味での琉球藍の生産と藍染にかかる事柄を紹介したいと思う。

つぎに第二章では、「琉球・沖縄の藍染料に関する年表」の試作について報告する。2025年11月、本部町伊豆味のみかんの里に琉球藍製造技術保存会の関連施設として藍染体験コーナーが開所した。筆者は、その施設の一角に掲げる「琉球藍関連の年表」作成に関わらせてもらうことになった。そこで、令和２年度博物館企画展「沖縄の藍」で作成した年表を基に、これまでに集めた史資料を精査して年表を再構成し、琉球藍製造技術保存会の監修のもとパネル化した。現在、みかんの里には横長の年表パネル（写真１）が掲げられているが、本稿ではその内容のみ抽出して再度編成し直して掲載することにする。

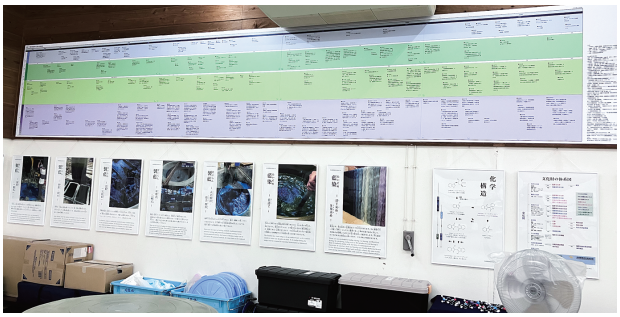

写真１　みかんの里に掲げられている年表パネル（上段）

[1)] 沖縄県立博物館・美術館　〒900－0006　沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900－0006, Japan

第一章　昭和初期の伊豆味集落での製藍業について

1 本部町伊豆味の沿革

本部町伊豆味は、本部半島の中央部に位置し、南に嘉津宇岳や八重岳、北に乙羽岳に囲われた山間の集落である。琉球王国時代には今帰仁間切の屋取から1666年（尚質19）本部間切伊豆味村になり、1909年（明治41）に本部村（現本部町）字伊豆味になった[2]。伊豆味が起伏に富んだ地形と河川から流れる豊富な水がある自然環境から、リュウキュウアイの栽培や製藍に適しており、古くから琉球藍の生産の中心地となってきた。伊豆味が琉球藍の元祖とされる伝説が、兼次佐一が著した『伊豆味誌』に紹介されている。昔伊豆味の「亀石山に北山の落武者が住んでいた頃、附近の者が藍の葉をいじって手を真黒にしたので、彼等が永年使用していた石造りの「かまど」の灰で手を洗わせたところ、完全に手が染まった。そこで、藍に石灰を入れることによって染料ができることを発明し、藍玉の製造を考えだした」という話である［兼次1965：129］。その真偽はともあれ、琉球藍は伊豆味の代表的な産物であり、明治時代から天然染料の需要拡大に伴い、砂糖と並ぶ価格で取引されるほど伊豆味の経済を支えていたといえる。『伊豆味誌』には「大正の末まで藍造りをしていない者とは金銭の貸借もさける位であった。藍さえつくっておれば借金の返済はできる」［兼次 1965：129］ということや、小橋川順市は著書『沖縄 島々の藍と染色』の中で古老から聞いた話として「昔は伊豆味の戸数（200戸）ほどのイェーチブがあった（中略）各戸がイェーチブを保有し、かつ藍造りをしていた」［小橋川2004：40］と言及しており、伊豆味のほとんどの家が琉球藍を生業のひとつにしていたものと考えられる。

明治時代に最盛期にあった琉球藍の栄華も、印度藍や人造藍の流入により急速に衰退し、昭和初期には全島の泥藍の生産高も最盛期の１割程度まで落ち込んだ［大湾1993：4］。そして沖縄戦で山野も焼かれ壊滅的な被害を受けた後には、伊豆味では20戸ほどが藍作を再開するも、昭和40年半ばには製藍業を営むのはわずか１戸だけになったのである。

2　太田康子氏の証言記録

（1）調査までの経緯と概要

2024年10月、某新聞紙上に「太田康子さん（当時97）の戦争体験の記事」が掲載された。その中で、康子氏が伊豆味のご出身で琉球藍の栽培農家で育ったという内容を見て、琉球藍製造技術保存会の池原幹人氏が連絡を取り、2026年10月27日、池原氏と筆者は太田氏のお宅を訪問した。そして、太田康子氏とご家族３名の方々に会い、孫の守史氏の協力のもと約２時間にわたってお話を聞くことができた。内容は、戦前から昭和20年代までの藍造りや染織仕事の話を中心に、康子氏の歩んでこられた人世談やご主人太田守福氏のお話、また誕生日を間近にひかえてご長寿の秘訣等々、いろいろなお話を伺った。そこで本稿では、インタビューした中から藍造りと染織に関連する事柄について紹介する。なお、証言の記載方法は、冒頭に筆者らの質問事項を表記（文末に ── を入れる）し、それに対する康子氏の回答を、ある程度まとめて記すことにした。

写真２　右から池原氏、太田康子氏と筆者

（2）太田康子氏の証言

〈アイ葉の栽培について〉

康子氏の実家は藍作農家ですか？ ──

うちは、藍の葉っぱしか植えてなかった。家族みんなで栽培していた。

その頃、アイを栽培している人は多かった？ ──

はい、もうほとんどというほど。みんな農家はこれしか金にならないから、これしか植えない。伊豆味は直射日光が少ないから、サトウキビは度数が低い。

アイを植えた場所はどのような所でしたか？ ──
あまり直射日光がある所ではなくて、半影みたいな所が良いから、あの伊野波盛正さんは南風原の喜屋武の方に藍入れていたから、あっちから帰りに必ずうちに寄って来て、家の後方に植えているアイを確認して手で揉みよった。

アイ畑は斜面か、それとも平地ですか？ ──
平地もあるが、アイを植えたところは大体底地みたいな所で、山の下の方で半影になる所。太陽がカンカン当たる所にはアイは植えない。

アイの収穫量と運搬方法は？ ──
収穫量は分からない。刈り取った葉っぱは男の人は 担いで、女は頭に乗せて運んだ。

アイの肥料は ──
昔は動物の糞。馬の糞はダメ、草を食ったままだからアイには向かない。豚とか山羊とか牛もいたから、これらの糞をみんなミックスして発酵させ、半年後にこれを肥料として入れた。藁は入れない。山羊の糞と牛糞とを混ぜて発酵させたら100℃ぐらいになる。これを一年中作っていた。(糞は)肥し小屋があってそこに積んでおいて、半年後にしか畑には入れない。アイは２ヵ年位したら収穫でき、刈り取った後には肥しを敷き詰めた。

アイの日覆はしましたか？ ──
アイを刈取った後は、夏はカジキ（蔭木）を立てて日除けをした。マツかシイの木の枝を切ってきて（アイの株の間に）立てて影にする。

アイの収穫はいつ？ ──
昔は梅雨の時。梅雨の時に葉っぱは少しでも乾いたらダメだから、雨の降る時、朝早く刈り取っていた。うちは男の人はお父さんが慶応生まれで70余りになっていたから、自分の家では藍玉は作らずに葉っぱを刈って売っていた。

葉っぱはどこに売っていましたか？ ──
伊野波セイショウさんのところ。セイショウと言っても何名もいて、文化財の盛正さんではない、カミヌーハのもう一人のセイショウさんに売っていた。

〈製藍について〉

藍造りで使う灰はサンゴ灰でしたか？ ──
サンゴの灰は生の葉っぱに入れた。恩納村に１ヵ所だけ石灰を焼く所があって、死んだサンゴを焼いて灰を作っていた。これを生のアイには使った。

名護にも石灰窯があると聞いたことはあるか？ ──
名護にあったのは見たことない。恩納は道路側で海との間に石灰窯があった。ここから買ってきた。この石灰は藍にも入れるけど、家の漆喰（餅）にするのにも藁と混ぜてからに発酵させて使っていた。

太田康子さんの本[3]に葉っぱと一緒に石灰を入れたとあるが、葉っぱを漬けるときに石灰も入れたのか？ ──
葉っぱと一緒に入れないと発酵しないでしょ。うちなんかは一緒に入れて、これが発酵したらもう夜中でも すぐかき混ぜて滓を取ると聞いた覚えある。

藍は「イェーダマ（藍玉）」と言いましたか？ ──
うん。

泥藍とかいう言い方は？ ──
泥は大島の方が泥染めしていたよ。泥藍という言い方はしなかった。

藍玉を造る人はたくさんいましたか？ ──
うん。カミヌーハや上伊野波、伊野波とか（聞き取り不調）。伊野波セイショウさんという私より年が14位上の大正５年生ぐらいの人が、よく作って本土からも買いに来て売っていた。

戦後の藍造りはどうでしたか？ ──
戦後になってからはあまり藍もなく、玉壺に入れていた（戦争）前の藍を売っていた。玉壺は戦争でも大丈夫だった。あっちに半年くらい入れて水かえたりして売った。

戦後すぐは藍玉を作っていたのは20軒ぐらいか？ ──
あったと思う。ウズンバルのヤマザトとか、古嘉津宇とか…。

〈藍建てについて〉

藍建てのときは何の灰使いますか？ ──
昔は必ずガジマル、生の木を切って燃やしてその灰でやっていたよ。

藍建ての方法は？ ──
藍の玉を50斤くらい買ってくる。つぎに、シンメーナービ（大鍋）で湯を沸かしてガジマルの灰を入れて沸騰させ、これを冷ましてから藍の玉を溶いて木の桶に入れる。木の桶に入れたら、夏は１週間から10日くらい、冬は２週間くらいで発

酵するから、発酵するまで毎日かき混ぜる。ガジマルの灰は冷ました後、灰も一緒に入れて、毎日かき混ぜる。

藍建てのときに木灰以外に入れるものは？ ──

冬になってあまり発酵しないときは酒を入れる。ほかに何か入れると言ったけど、水飴みたいなものではなく、薬品だったはず。

夏場は入れない。冬の発酵が悪いときだけお酒。それでもこんなに綺麗に染まった。今はこんなに綺麗には染まらない

〈康子氏の染織作業について〉

康子さんはどこで染めや織物を習いましたか？ ──

（昔は）金持ちではなくても、家族がいっぱいいて娘がいるところでは染物もするし、蚕養って糸をとって、これを母が染めて機にのせるまで全部自分でやった。戦後の（昭和）21年から23年までは、芭蕉とかいろいろ織りました。芭蕉も自分たちで糸を作って。

芭蕉はね、肥し小屋の下の肥しの汁が出る所に植えた。自分たちで糸作りもして織りもした。

織機は高機ですか？ ──

高機。戦前も昭和の初めから高機で織っていた。戦争でうちは焼けたけどね、カミヌーハとかは残っていた。うちのモリヒデの家も高機が残っていたので姉さんが他の人の着物も織っていた。地機は記憶にない。

（康子氏の織った着物等を見て）

藍色がとても濃いがこの着物は藍だけですか？ ──

はい、４、５回くらい染めたんじゃないかな。真っ黒のものが藍染め、「クンジー」というもの。真っ黒は絹。絹はよく染まるよ。

４回ぐらいで染まるのは驚きですが、藍の質がいいからですか？ ──

仕上げは新しいので染めたはず。藍が一番上等のときに仕上げる。

10回20回とかは染めないんですか？ ──

ううん、４、５回ぐらいだったと思う。

ものすごく濃い濃度で染めたんでしょうね？ ──

今はガジマル木じゃないから、そんなに発酵しないのかも。ガジマルでないと綺麗な色は出ないと思う。昔の人が上等と言うのは上等だ。

イイチリ絣は康子さんが織ったものですか？ ──

これは姉さんが織った。私がこういうものを着けたくて、母にこれを織ってと言ったら、この模様はアヤー（綾）の中に（絣が）入らないと本当のイイチリにはならないから、人に笑われるから作らんと言っていた。けれども私はそれでもいいから着けると言って。でも私はイイチリは習ってなかったから、那覇で織物を習ってきた姉に（お願いした）。

お姉さんは那覇のどこで習ったのか？ ──

那覇の泊の方で、昭和の初め頃３～４年ぐらい。

イイチリを括るのは誰がやりましたか？ ──

それは母がやっていた。長板というものを使って。でも糸も長板も戦争で焼けてなくなったから、もう作れない。母は無学だけど、機にのせるまでの足し算引き算割り算掛け算をわからないとできないよね。幾ヨミって、10ヨミだったら40組、１ヨミで40組だから400組よね。

織物の計算は上手にできたんですか？ ──

はい、やり方があって、芭蕉の茎を大きいのと小さいのと切って、なんていうのか、茎を１回転したら１つ寄せたりして 計算していた。

この芭蕉の茶色の染料は？ ──

これは赤染みといってテッカチー、クービとかいった。その根っこ掘ってきてから煮て…。クービは木でなるツルみたいだけど 固くてトゲがある[4]。

この布は経糸も緯糸も絹ですか？ ──

はい、これは自分で蚕から養って糸取って（作った）

この着物はいつ作ったものですか？ ──

戦前のものはない。戦後になってから。

写真３　康子氏が織った着物

芭蕉の繊維の取り方も康子さんたちはご存知でしたか？ ──

芭蕉はね、あれも灰入れて炊くんだよ。灰は毎日どこの家でも薪燃やして灰が出るさーね、その灰で芭蕉の（繊維を）取る

とき、炊きよった。

木綿糸はどうして入手しましたか？ ──

木綿糸は、戦前は売っていたよ。あの着物ある？着物に入っているあの浅地みたいなものは木綿の糸だけど、船のロープだったの 戦争で船が焼けたから、これを一反分ずつ本部から売りに来る人がいたから買った。

ロープから解いて糸が作られたのか？ ──

ロープは糸でまとめられていたから、これを解いて売っていた。木綿糸は、買ってから撚りするのとかは（自分で）ヤーマで撚りをかけた。

〈模様について〉

縞の模様とかは康子さんが考えたんですか？ ──

はい。（微妙に絣が入っている着物について）これも考えて、ムディアヤといって縞、白と黒が入ったもの。冬物は必ずムディアヤといって白と黒をこう撚りしたものを着る。夏物にはあれは入れない。何か意味があるかはわからないが、昔の人がそう言う。

〈織物の道具について〉

織物の道具も残っていますか？ ──

これは、杼、杼じちぐぁーといって、戦後になって旦那さんが作ってくれたもの。

筬は買ったもの。綜絖は自分で作りよった。

筬等の道具を売る所は那覇にあったんですか？ ──

写真４　ご主人が作った杼と道具類

戦前はあっちこっちにあったはずよ。これらは戦前のもので戦後は買ってないし、買えない。

注：これらの資料は、令和６年本部町立博物館の企画展で展示された。

（3）太田康子氏の生い立ちと生活について

太田康子氏は、1926年（大正15）伊豆味で琉球藍を栽培する農家の14人きょうだいの７女として生まれた。父は座間味栄保氏、母は座間味カマド氏で、実家は親名原にあった。伊豆味尋常小学校を卒業した後、昭和18年に徴用され日本軍の陣地整備作業等に従事された。沖縄戦で実兄をはじめ親族６名が戦死し家もすべて焼かれるなど、筆舌に尽くしがたいほど苦しい体験をされた。終戦後収容所から昭和21年に伊豆味に戻り、昭和23年に同郷の太田守福氏と結婚するまでの間に染織の仕事していた。昭和27年に嘉手納、昭和30年にコザ（現沖縄市）での居を移し、長い間太田商店を経営していたそうである。

康子氏は、孫の守史氏によると、最近の話は覚えてないけど、昔の話は泉のように湧き出てきて、テレビで何か話題があったら「昔はこんなだったよ」とすぐに口からパッと言葉が出てくるそうで、毎日発見があるという。

現在の康子氏の日課は、朝７時頃に起きてご飯をゆっくり食べ、ちょっとテレビを見る。目が不自由になる前までは屋上に上がって野菜を作っていたそうで、朝の涼しいうちと夕方の太陽が高くないときに、時間通りに作物の世話をしていた。康子氏は、時期になると種を取ってから、来月の始めには エンドウを植えることや６月に植えた黒豆の収穫が残っているお話もされた。

最後に、ご主人の故太田守福氏のことも少しお話いただいた。守福氏は戦前出稼ぎで広島に行き、昭和20年の原爆投下で被爆されている。守福氏は、2013年91歳でご逝去され、2018年広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式典に太田康子氏が被爆者遺族として出席した。その際に広島大学平和センター研究員の嘉陽礼文氏と出会い、その後嘉陽氏は康子氏に聞き取り調査を行い、その内容を太田守史氏らと協力して一冊の本にまとめ2022年に出版した。それが『太田康子（太田守福の妻）聞き書き　戦前・戦中・戦後の沖縄を生きて―九十年来をかえりみる』という本である。

この中には、康子氏が伊豆味で育った時の衣食住に関する話や戦中、戦後の話が収録されている。過酷な戦争を体験し困難な状況を乗り越えてこられた康子氏の人生そのものが語られた本である。康子氏は、守福氏亡き後も孫の守史氏と平和祈念式典に参加するなど平和を願い続けている。2022年にはカジマヤーを迎え、大勢の家族や親戚がお祝いにかけつけたそうである。100歳近くになっても抜群の記

憶力と優しいお人柄や語りで、家族に大切にされながら日々お過ごしである。

3　インタビューを終えて得た発見と感動

今回紹介した太田康子氏のお話は、戦前の伊豆味の暮らしぶりや藍造りが盛んだった頃の風景、そして日常生活の中で染めや織り作業をしていたことなどを想起させる貴重な証言であった。戦前の伊豆味ではどの家も藍造りに携わっていたことや家庭で染めも織りもしていたことなどを学ぶことができた。インタビューの冒頭で、康子氏から「藍壺に入れる湧き水はまだありますか」という質問があった。池原氏が「湧き水はまだあり、それを使っています。」と答えると、「湧き水があって良かったねー」との康子氏の声。今でも藍造りと水が切っても切れないもので、伊豆味の自然がそれを支えていることを教えてくれた。康子氏のますますのご健康を祈りつつ、まだまだ教えていただきたいので次回のインタビューを実現したいと考えている。

第一章の最後に、大田康子氏とご家族の皆様には長時間に渡って貴重なお話を聞かせていただき、心から感謝を申し上げる。また、太田守史氏には、『太田康子（太田守福の妻）聞き書き 戦前・戦中・戦後の沖縄を生きて―九十年来をかえりみる』の本のコピー等を丁寧にバインダーにしてご提供いただき、インタビューにもご協力いただいた、重ねて御礼を申し上げる。さらに、琉球藍製造技術保存会の池原氏にもあわせて感謝の意を表したい。

写真５　イイチリの着物を着た康子氏
（2021年10月9日撮影／写真提供：太田守史氏）

第二章　「琉球・沖縄の藍染料に関する年表」作成の試み

つぎに本稿の二題目として、琉球藍の歴史を中心にした藍染料の年表を作成したので、それについて述べる。この年表は、沖縄県立博物館・美術館の令和２年度博物館企画展「沖縄の藍」展の展示や図録用に製作したもの[5]を土台に、再度内容と参考資料を確認して一部修正・追記したものである。年表は、はじめに述べた通り、本部町伊豆味の琉球藍体験施設内に掲げる目的で作成したもので、実際には横長の巨大なパネル（写真１）である。年表の項目は「琉球藍に関連するできごと」と「背景にあるできごと（概要）」に２分割し、実物では「沖縄島・久米島」と「宮古・八重山諸島」を若干分けて提示した。しかし、本稿では紙幅の関係上、琉球藍に関連するできごとは「沖縄」一つにまとめ、背景のできごとのみ「琉球・沖縄」「日本」「世界」に区分して大体年号が並ぶよう構成し直した。

琉球藍の年表の先行研究には、小橋川順市氏が『沖縄 島々の藍と染色』の中で「琉球藍の盛衰区分と主な出来事」と題して表にまとめたものがある。また盛谷理絵氏は「沖縄本島におけるリュウキュウアイの泥藍づくりに関する研究」の中で、小橋川氏の時代区分に沿って文献資料から歴史的な出来事を広い出して述べている。本年表の作成では、小橋川、盛谷両氏の資料も参考にしながら、これまで集めた資料をできる限り網羅し、琉球藍を取り巻いた時代背景がわかるよう工夫したつもりである。未発掘な資料もまだあると思うが、現時点での年表として活用していただければと思う。

表１　琉球・沖縄の藍染料に関わる略年表

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
15世紀	●伝説 『伊豆味誌』によると、伊豆味の亀石山に北山の落武者が住んでいた頃、藍葉をいじって手を真っ黒にした者にかまどの灰で手を洗わせたら完全に染まったので、藍に石灰を入れて染料ができることを発見し、藍玉の製造を考え出したとある ●1479年 『朝鮮王朝実録』「成宗康靖大王実録」に1477年２月の記録として、与那国島で苧を織り染めは藍青を用いることや多良間島で苧布を藍で染めて衣をつくることが漂着民の証言から記される	●1416年 尚巴志、北山を滅ぼす ●1429年 尚巴志、南山を滅ぼし、三山を統一する ●1470年 尚円即位（第二尚氏王統始まる）		●15世紀～17世紀後半 大交易時代。1498年にはバスコ・ダ・ガマが喜望峰を回る東洋航路でインドに達する。これ以降インド藍がヨーロッパに持ち込まれて広まる
16世紀	●1583年 宮古島の下地（親雲上）真栄の妻・稲石が紺細上布を製作したといわれる	●1502年 久米島の堂之比屋が中国より養蚕技術を学び広めたといわれる ●1524年 尚真王、初めて百官を定め、六色の帕を製し衣冠を制定する	●1532～1556年 木綿の栽培が本格的に始まる ●1585年 初代徳島藩主・蜂須賀家政が藩の財政確保のため藍作（タデアイ）を保護・奨励する	
17世紀	●1611年 儀間真常が薩摩からワタの種を持ち帰り栽培。以後木綿の普及に伴い藍染めが浸透したと考えられる ●1612年 『琉球国由来記』「染物師」の項に、薩摩の酒匂四郎右衛門景陳（剃髪して善済と称す）が沖縄に定住し、初めて藍染めを教えたと記される ●1639年 『球陽』に、王殿に坐す時、王子及び按司は大緑衣、紫巾官より諸士まで大青朝服、諸郡掟・目差より家来赤頭・匠工輩まで月白の朝服を服すことを定めると記される ●1659年 人頭税のもと宮古・八重山等の貢租を上布で代納させることが定められる	●1609年 薩摩による琉球侵攻 ●1634年 慶賀使・謝恩使の始まり ●1637年 宮古・八重山に人頭税が課される	●1603年 江戸幕府が成立 ●1625年 徳島藩が藍方役所を置き、藍作の奨励と販路拡張にあたる ●1641年 鎖国完成	●1600年・1602年 イギリスとオランダに東インド会社が設立される ●1624年 オランダ東インド会社、台湾統治を開始 ●1634年～1646年 オランダ東インド会社が台湾南部でインド藍（木藍）栽培を試み、藍靛生産に着手するが失敗 ●1647年～1650年代 台湾の藍靛生産の経営を中国人農民に委ねる ●1684年 清朝が台湾を領有し、台湾南部で木藍栽培を継続する
18世紀	●1702年 宮古島の与那覇（与人）恵治が藍蔵役となり、御用布の染方を藍一色に定めた。この染場を「藍屋」と称し、その井戸を「藍屋井」という	●1735年 蔡温が羽地大川の改修工事を行う ●1736～1748年 蔡温は中頭～国頭間切の山林を視察し、林政に関する７書を編纂する	●1733年 徳島藩で、藍方御用場を設け、葉藍・染の自由な移出を禁止。藩が税収増大を企図し品質管理に乗り出す ●1747年 長崎貿易でベロ藍が初めて輸入される	●18世紀初頭 ドイツで「ベロ藍（プルシアンブルー）」が発見される

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
18世紀	●1768年 「与世山親方八重山島農務帳」に、御用布用に藍と苧畑を手広く仕立てさせ、百姓らが念入りに栽培するよう指導を命じたと記される ●1794年 『琉球館文書』に、薩摩の船頭や水主らが国頭辺りの百姓から藍を買い取っていたと記される ●1794年 『琉球館文書』に、国頭辺りの百姓らが、山陰や沢辺等の湿った場所を耕作し、畝を立てて藍を栽培し、那覇の染物屋に売っていた。 その余剰分を鹿児島へ出張する役人が買い、持って行ったことが記される ●1799年 『琉球館文書』に、薩摩藩の春田九内が藍玉を一手に買い入れたいと王府に願い出たが、特定の船頭が藍玉を買い占めると買取価格が下がり、百姓の利益が損なわれるとの理由で断ったことが記される	●1771年 宮古・八重山に大津波発生（明和の大津波）	●1756年 徳島藩で、一般の藍作人から藩政に強い反発が起こり、葉藍取引税廃止等を求める「五社宮一揆」が起こる	●18世紀中半 アメリカ南部の大規模農園で奴隷労働による藍生産始まる ●18世紀後半～19世紀前半 イギリスで産業革命が起こり綿織物産業の急成長に伴い、藍染料の需要が増大する ●1775年～1783年 アメリカ独立戦争。 これにより、藍生産は急速に衰退し、綿花に代替された ●1780年以降 イギリス東インド会社がインドで藍の商業栽培を本格化させる ●18世紀後半 台湾の台北山間部で山藍の栽培が始まる
19世紀	●1844年 旱魃と大風で大きな被害を受けた宮古島へ農村を立て直すために役人を派遣した。 この頃より首里王府が宮古、八重山諸島で真苧や藍の生産を奨励する ●1847年 今帰仁間切に対して、藍と唐苧の作付けを禁止（「道光二十七年未年今帰仁間切御訴書抜」）。 近隣の間切でも禁止されたと考えられる ●1851年～1874年 『球陽』に、苧麻・藍等の生産奨励の功績が認められ、黒島首里大屋子（1851年）、宮古島来間村の仲宗根仁屋等５名・同新里村渡真利仁屋等２名（1859年）、八重山島大川村の平良仁屋等５名・宮古島仲地村の下地仁屋等５名、砂川与人（1860年）、八重山島平得村の慶田盛仁屋（1862年）、宮古島与那覇村の本村筑登之等６名（1864年）、八重山島釀川村の加那嵩西（1874年）に褒賞や爵位を賜うと記される ●1857年 『翁長親方八重山島諸締帳』に、首里王府が石垣の四ヶ村（大川・登野城・新川・宮良）に役人を配置し、百姓らに真苧と藍の生産指導を行い、巡察して報告するよう命じたことが記される ●1857年 「八重山島旧規書類」から抜粋された文書に、真苧と藍の作付面積を増やし、一定の生産量を確保して御用布を完納するように指揮・監督する掲示が記される	●1816年 イギリス軍艦アルセスト号・ライラ号が来航し、以後外国船が頻繁に来琉する ●1846年～1854年 イギリス宣教師ベッテルハイムが琉球に派遣され那覇に８年間滞在し、伝道と医療活動を行う ●1853年 ペリーが那覇に来航し、翌年琉米修好条約が結ばれる	●1829年～ ベロ藍が大量に輸入され、藍色の濃淡で刷る浮世絵版画が登場する ●1853年 ペリーが日本に来航し、翌年日米修好条約が結ばれる ●1865年 薩摩藩の藍玉所係の有馬藤兵衛が琉球藍に「山藍」「泥藍」の名称をつける	●1856年 イギリスのパーキンがアニリンを原料とする紫色の合成染料「モーブ」を発明する ●1859年 インドのベンガル地方で東インド会社に抵抗して藍一揆が勃発する ●1861年 アメリカ南北戦争が始まる

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
19世紀			●1867年 アニリン染料が輸入され、この頃インド藍も輸入される	
	●1869年 『同治八巳年恩納間切惣耕作当日記』に、山陰などで栽培する特用作物の藍を、食糧の耕地に植えることを禁止すると記される		●1868年 王政復古の大号令（明治維新）薩摩藩は鹿児島藩になる	
		●1871年 台湾遭難事件が起こる。明治政府が琉球を鹿児島県の管轄となす	●1871年 鹿児島藩が鹿児島県になり、琉球藍の県外への持ち出しが解禁される	
		●1872年 維新慶賀使が上京し、琉球藩が設置される	●1872年 大蔵省達「田畑勝手作許可」の布告をもって製藍の製造販売も自由化される	●1873年 アメリカでリーバイ・ストラウスらが工場を設立し、インディゴ染めのズボン等を仕事着として製造。以降インディゴ染めのデニムが流行する
	●1875年 『富川親方宮古島諸村公事帳』に、村番所の囲いの中で唐藍を作らせたことや、真苧と藍の出来高を報告させたことが記される			
	●1875年 『富川親方八重山島諸村公事帳』に「藍遣人」という貢納布の綛を抜き取って調べたり、染色をする役目のことが記され、『富川親方八重山島諸締帳』に、首里王府が石垣の四ヶ村に「苧藍下知筆者」という役人を２人ずつ「新苧藍仕立加勢筆者」を２人ずつ配置したことが記される		●1875年 『山藍實用眞書』に、鹿児島県人磯永吉助が山藍栽培法を東京報知新聞に紹介したことを機に、静岡県の高橋次郎が鹿児島から静岡に苗株を移植して藍靛を製造し、第一回内国勧業博覧会に出品して三等を得たと記される	
	●1875年 『富川親方八重山島農務帳』の「藍仕立并製法之事」に、藍（琉球藍）の栽培・製法、作付面積が詳しく記される			
	●1875年 『忠導氏家譜（仲宗根家）』に、十五世玄教（大宜味仁屋）が、柚山筆者天久仁屋が新城村で数々の業績を上げたので「星功」を与えるように願い出たことが記される。藍の生産量を増やしたことも業績の一つとなっている			
	●1879年～ 松田道之らが来航し、琉球藩を廃して沖縄県を置くと通達する。これにより琉球王国は消滅し、禄を失った士（サムレー）の一部が国頭郡や中頭郡の山中に移り住んで帰農し藍作を始める	●1879年 明治政府が琉球藩を廃して沖縄県を置く。尚泰、首里城を明け渡し、東京へ移住する ●1879年～1903年 明治政府の旧館温存政策により宮古・八重山では人頭税廃止まで貢納布制度が継続される	●1879年 五代友厚が阿波藍を原料にした沈殿藍の研究に取り組み、大阪に製藍所西朝陽館を設立。藍染業の販路拡大にむけ技術革新を試みる	
	●1880年 『沖縄県日誌』のなかに、名護間切の住民が那覇あるいは伊江島等へ薪や藍等を売買していたと記される	●1880年 沖縄師範学校設置、また14の小学校が設置される		●1880年 ドイツのバイヤーが人造藍の合成に成功する
	●1883年 『伊豆味誌』によると、山藍の作付面積は93,912坪で、当時の藍玉価格は砂糖と同額で換金作物として有用であったとある			
	●1886年 今川粛『日本山林副産物製造編』の「60 山藍」の項に泥藍製造法が記される			
			●1889年 大日本帝国憲法発布	
	●1890年 石井清吉ら『山藍新書』を出版。沖縄の山藍が利益を生む農作物とみて、本土に移植するため沖縄の栽培方法を紹介した			

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
19世紀	●1891年 村松壽策が『山藍實用眞書』を出版。明治維新前後から琉球藍の有用性に着目して本土での蕃植を試みた人々の動きや、栽培から製藍、建方までの方法を詳しく記した ●1894年～1897年 杣山の開墾政策が実施され、中頭郡と国頭郡ではリュウキュウアイの栽培を目的に山林が開墾される ●1894年 『一木書記官取調書』によると、一木喜徳郎が藍の生産状況を調査し発展の可能性を示した ●1898年 新聞紙上に、山原地方で春藍豊作にして夏の製藍も収穫高が多く値が低廉になると示唆される ●1899年 新聞紙上に、藍作は年々拡張し２千万斤以上になったが、印度藍の流入により価格が低落し藍作家の困難を伝える記事が掲載される	●1892年 宮古に人頭税廃止運動が起こる ●1894年 沖縄島北部の杣山開墾を巡って奈良原知事と謝花昇が対立。 その後、杣山開墾は中頭郡で２回、国頭郡で３回行われた ●1894年 沖縄島北部の杣山開墾を巡って奈良原知事と謝花昇が対立。その後、杣山開墾は中頭郡で２回、国頭郡で３回行われた ●1899年～1903年 土地整理事業を実施 ●1899年 第一次ハワイ移民団出発 ●1900年～1945年 首里区立女子実業補習学校（のち沖縄県立首里高等女学校）が設置され、実業教科として機織・染色・裁縫・刺繍等の教育が行われる	●1894年 日清戦争勃発 ●1895年 日本による台湾統治。台湾の藍靛産業の調査が始まり、殖産事業の一つとして台北で山藍（リュウキュウアイ）を、その他の地域で木藍（インド藍）を生産する	●1897年 BASF社が人造藍の工業生産を開始する
20世紀	●1903年 新聞紙上に、ドイツで発明された人造藍の発達と由来に関する記事が掲載され、天然藍と比較した効能が紹介される ●戦前期 木綿の琉球紺絣の主産地として、那覇の泊町、垣花町、小禄村、糸満町、南風原村が機業の中心地であった。泊町は中心的生産地であったとともに各生産地から絣織物を買い集めて全国へ移出していた ●1909年 新聞紙上に、近年廉価な人造藍が輸入されて山藍の価格暴落が示唆される ●1914年 欧州で第一次世界大戦勃発。1916年の新聞紙上に、この戦乱で人造染料が大暴騰し、天然藍の需要が増加したとの記事が掲載される ●1915年 沖縄県技師の児玉親徳は『沖縄県染料植物』を、国頭郡役所勧業主任の平良弥人は『山藍ニ関スル調査書』を著し、山藍（リュウキュウアイ）の栽培、泥藍の製造、藍建ての方法を報告する	●1903年 宮古・八重山の人頭税が廃止される。税制改正で宮古上布等の上納廃止につき、宮古島では粗製濫造を防ぐため宮古郡織物組合が設立され、品物の検査が始まる ●1903年 第五回内国勧業博覧会織物審査で各府県の木綿紺絣の審査が行われ、沖縄県紺絣は山藍を用いて美妙な色合いと香気を有し堅牢であるなどと報告される ●1908年～1925年 久米島尋常高等小学校を起源とし、機織技術の修得を図る久米島女子工業徒弟学校が開校する。このほか小禄や糸満など各地に徒弟學校ができる ●1924年 第一次世界大戦後の恐慌強まる（ソテツ地獄）	●1903年 徳島県の藍の生産量が過去最高を記録（２万1958トン） ●1903年 ドイツから人造藍が本格的に輸入される ●1904年～1905年 日露戦争 ●1910年代 国内での合成染料の研究が始まる ●1923年 関東大震災	●1914年～1918年 第一次世界大戦 ●1920年代～1950年代 台湾では藍靛生産が次第に減少し、50年代には天然藍はほぼ消滅

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
20世紀			●1931年 満州事変勃発	
	●1932年 1927年に設立した沖縄県工業指導所の初代専任所長に安谷屋正量が着任。藍染の粗製濫造防止のため「染色取締規則」等を制定し、厳重な検査を行って品質改良に取り組んだ		●1932年 三池染料工業所が合成染料の本格的生産を開始する	
	●1933年 国から産業助成金等が支出され「沖縄県振興計画（15ヶ年）」を実施。その中に「山藍奨励費」を計上し、当時の作付面積約30町歩から1,300町歩に、藍壺の設置3,000ヵ所を目指して琉球藍の増産を奨励した			
			●1937年 日中戦争勃発	
	●1938年～1940年 柳宗悦ら「日本民藝協会」の第二回沖縄調査から参加した田中俊雄が、沖縄の染織物の調査を行い、のちに玲子夫人と共同で『沖縄織物裂地の研究』を著した（1954年）。また土門拳は本部町伊豆味で藍壺の全景を写真に収めた	●1944年 10・10空襲 ●1945年 米軍が慶良間諸島～沖縄島に上陸し地上戦となる	●1941年～1945年 太平洋戦争	●1939年～1945年 第二次世界大戦
	●沖縄戦後 琉球紺絣の生産の中心が南風原に移り、それにともない本部や今帰仁で琉球藍の製造が再開された。読谷山花織や宮古上布等が復活して一時琉球藍の需要が増加したが、アメリカ統治下における欧米文化の流入によって衣料の洋装化が進み、琉球藍を使用する染織物の生産も減少に転じた	●1945年 米国の施政権下に入り、翌年沖縄民政府設立	●1945年 太平洋戦争終結、降伏文書調印	
	●1946年～ 終戦後本部町では20数名が製藍業を再開する		●1946年 日本国憲法公布	●1947年 東西冷戦の始まり ●1948年 大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国建国 ●1949年 中華人民共和国建国
			●1950年 「文化財保護法」が制定される	●1950年 朝鮮戦争勃発
		●1952年 琉球政府設立	●1951年 サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約調印	
		●1956年 プライス勧告発表、島ぐるみ闘争（反基地・土地闘争）が起こる	●1953年 奄美の施政権が日本に返還される	●1956年 第二次中東戦争
	●1960年代 本部町伊豆味で泥藍づくりの従事者とて饒平名家や伊野波家等が記される	●1960年 沖縄県祖国復帰協議会が結成され、復帰運動が活発になる	●1964年 東京オリンピック開催	●1961年 ベルリンの壁構築
	●1965年前後 1965年前後には廃業が相次ぎ、伊豆味で栽培されたリュウキュウアイの７割が伊野波盛正氏のもとに集約された。残り３割と今帰仁村呉我山のリュウキュウアイは本部町山里の比嘉良興氏と呉我山の伊波興喜氏のもとに運ばれたという	●1967年 コザ暴動	●1967年 徳島県阿波あい生産保存会が設立され、阿波藍の本格的な復興に向けた取組を開始する	●1965年～1975年 ベトナム戦争

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
20世紀	●1968年 仲井真治子の「琉球染織に関する研究」において、今帰仁村呉我山の泥藍が宮古上布の染料として宮古島で使用され、残りを琉球絣の染料として南風原町に運ばれたことが報告される			
	●1969年 伊野波盛正氏、琉球工業研究指導所の山里将秀氏の指導のもと、二段式の製造施設を設置し、新方式の製藍に着手する			
	●1972年 今帰仁村呉我山では、かつて数十軒が製藍業を営んでいたが、戦後藍作からキビ作等に転換し、今では呉我山には１軒のみになったと報告される	●1972年 沖縄の施政権が日本へ返還され、沖縄県となる		
	●1972年 製藍業の従事者が伊野波盛正氏１名となる			
	●1972年 沖縄県が「沖縄県工芸産業振興審議会」を設置			
	●1973年 沖縄県が「沖縄県伝統工芸産業振興条例」条例第72号を制定	●1973年 特別国民体育大会「若夏国体」が開催される		●1973年 第四次中東戦争（第一次石油危機）
	●1973年 沖縄県による「共同作業場等建設費補助事業」において、本部町伊豆味の「泥藍つくり」に対して「琉球藍生産設備」を対象とする決定がなされる			
	●1974年 沖縄県商工労働部に伝統工芸課が設置される	●1974年 文部省（現文部科学省）が「喜如嘉の芭蕉布」を重要無形文化財の保持団体に指定する	●1974年 通商産業省（現経済産業省）が「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」及び「伝統的工芸品産業の振興に関する法律施行規則」を制定する	
	●1975年 沖縄県が「琉球藍葉生産事業補助金交付要綱」でリュウキュウアイの作付けに対し、栽培農家に補助金を交付するよう定める（2004年度終了）	●1975年 「沖縄国際海洋博覧会」が開催される		
	●1975年 「工芸品産業の振興に関する法律」にもとづき、沖縄の伝統的技法によって製造される工芸品を「伝統工芸品」と指定。その中の「琉球びんがた」の「藍型の藍染は、琉球藍を用いること」と指定する	●1975年 通商産業省（現経済産業省）が「久米島紬」と「宮古上布」を国指定伝統工芸品に認定する		
	●1976年 琉球大学農学部で琉球藍の醗酵建に関する研究が始まる	●1976年 通商産業省が「読谷山花織」と「読谷山ミンサー」を国指定伝工芸品に認定する		
	●1977年 文部省（現文部科学省）が伊野波盛正氏を「琉球藍製造」の選定保存技術保持者に認定する（2021年解除）		●1977年 徳島県で藍染め研究と技術向上等を目指し「徳島県藍染研究会」設立	
		●1978年 交通変更が行われる（730）	●1978年 阿波藍の保存と発展を目的とした「阿波藍製造技術保存会」が設立し、国選定保存技術保存団体に認定される	
	●1979年～ 沖縄県立伝統工芸指導所で琉球藍の製造技法に関する研究が行われる	●1978年 文部省が「宮古上布」を重要無形文化財の保持団体に指定する		●1979年 イラン革命（第二次石油危機）

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
20世紀	●1983年 比嘉良有氏が製藍業を再開する ●1988年 上山和男・弘子氏が製藍業を始める ●1999年 本部町を中心とした「琉球藍製造技術保存会」が組織される	●1983年 通商産業省が「琉球絣」と「首里織」を国指定伝統工芸品に認定する ●1984年 通商産業省が「琉球びんがた」を国指定伝統工芸品に指定する ●1987年 通商産業省が「与那国織」を国指定伝統工芸品に認定する ●1988年 通商産業省が「喜如嘉の芭蕉布」を国指定伝統工芸品に認定する ●1989年 通商産業省が「八重山上布・八重山ミンサー」について石垣市織物事業協同組合と竹富町事業協同組合を国指定伝統工芸品に認定する	●1995年 阪神・淡路大震災地下鉄サリン事件発生	●1985年 台湾省手工業研究所が天然染料の研究開始 ●1986年 チェルノブイリ原発事故 ●1989年 ベルリンの壁が崩壊し、翌年東西ドイツが統一（冷戦終結） ●1991年 ソ連崩壊、湾岸戦争 ●1998年 台湾で山藍の一連の製藍工程を具現化し、以降台湾藍の生産が復興する
21世紀	●2002年 文部科学省が「琉球藍製造技術保存会」を選定保存技術保存団体に認定する ●2004年 小橋川順市氏らが伊豆味の藍壺を調査し「琉球藍の藍壺所在調査報告」を出す ●2010年 沖縄県工業技術センターにて琉球藍の醗酵菌について微生物学的研究を行う ●2010年代～ 沖縄県内各地で、新たに琉球藍の製藍事業者が増加。 伝統染織産業のほか新しく藍染ファッション産業や工芸品への藍の需要が増加する ●2019年～2022年 沖縄県は、芭蕉布・苧麻糸・琉球藍の安定した生産を目指して「工芸品原材料確保事業」を実施する	●2000年 「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が世界遺産に登録される ●2003年 文部科学省が「宮古苧麻績み保存会」を選定保存技術保存団体に認定する ●2004年 文部科学省が「久米島紬」を重要無形文化財の保持団体に指定する ●2012年 経済産業省が「知花花織」を国指定伝統工芸品に認定する ●2017年 経済産業省が「南風原花織」を国指定伝統工芸品に指定する ●2019年 首里城火災	●2011年 東日本大震災	●2001年 アメリカ同時多発テロ（9.11） アフガニスタン戦争 ●2003年 イラク戦争

世紀	琉球藍に関連するできごと	世界・日本・琉球の略年表（背景にあるできごと）		
	沖縄	琉球・沖縄	日本	世界
21世紀	●2020年 沖縄県立博物館・美術館が「沖縄の藍－自然と人が織りなす製藍の技－」と題した企画展を開催する			●2022年 ロシア・ウクライナ戦争 ●2023年 イスラエルがガザに侵攻

＜参考文献資料＞

・図録「令和２年度博物館企画展・沖縄の藍 ―自然と人が織りなす製藍の技― 」沖縄県立博物館・美術館, 2021
・盛谷理絵「沖縄本島におけるリュウキュウアイの泥藍つくりに関する研究」（大阪芸術大学博士論文）2015
・小橋川順市『沖縄 島々の藍と染色』染織と生活社, 2004
・小橋川順市・伊野波盛勝「琉球藍の藍壺所在調査報告書～単槽式製藍施設（藍壺）の残存調査～」琉球藍製造技術保存会, 2004
・仲地哲夫「近世後期の琉球における藍の生産と流通をめぐって」『史料編集室紀要 第20号』沖縄県立図書館史料編集室, 1995
・石井清吉『山藍新書 全』1891
・村松壽策『山藍實用新書』1890（NDLデジタルデータ）
・『沖縄県史 資料編５ 染織関係近代新聞資料 技術１』沖縄県教育委員会, 1997
・東京大学総合図書館旧蔵朝鮮王朝実録画像データベース「成宗実録第３帙巻105己亥10年（1479）８月」(https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/jitsuroku/page/home)
・伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編「琉球国由来記」『琉球史料叢書 第一』名取書店, 1940
・琉球・沖縄貴重資料デジタルアーカイブ『薩琉往復文書集［琉球館文書］三』琉球大学附属図書館（https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/nakahara/na00301）
・球陽研究会編『球陽 読む下し編』角川書店, 1974
・名桜大学『琉球文学大系』編集刊行委員会編『琉球史関係史料２ 球陽』ゆまに書房, 2024
・史料編集室編『沖縄県史 資料編５ 染織関係近代新聞資料 技術１』沖縄県教育委員会, 1997
・「与世山親方八重山島農務帳」『沖縄県史料 前近代６ 首里王府仕置２』沖縄県教育委員会, 1989
・石垣市史編集委員会「与世山親方八重山島農務帳」『石垣市史 八重山史料集２ 豊川家文書Ⅰ』石垣市, 1995
・「翁長親方八重山島諸締帳」『沖縄県史料 前近代６ 首里王府仕置２』沖縄県教育委員会, 1989
・「富川親方八重山島農務帳」『沖縄県史料 前近代６ 首里王府仕置２』沖縄県教育委員会, 1989
・下地和宏「村々の百姓役目について」『宮古島市総合博物館紀要　第19号』宮古島市教育委員会, 2015
・今川粛『日本山林副産物製造編』1886
・児玉親徳「沖縄縣染料植物」1915年調査
・平良弥人「山藍ニ関スル調査」1915年調査
・兼次佐一『伊豆味誌』琉球史料研究会, 1965
・大湾ゆかり「リュウキュウアイに関する資料紹介（1）～（4）」『沖縄県立博物館・美術館博物館研究紀要 第15～18号』2021～2024
・大湾ゆかり「沖縄本島北部における琉球藍の生産とその社会的背景」『沖縄民俗学会誌 第13号』沖縄民俗学会, 1993
・大湾ゆかり「藍壺雑考」『沖縄県史研究紀要 第21号』沖縄県教育委員会, 1998
・国立国会図書館「史料にみる日本の近代」年表（https://www.ndl.go.jp/modern/utility/chronology.html）
・蔡承豪『天染之色 ―大台北における藍靛産業発展史』台湾玉山社, 2024
・鍛冶博之「現代徳島における阿波藍の衰退と振興」『社会科学 第51巻 第３号』同志社大学人文科学研究所, 2021

[1] 本稿では、琉球藍の名称について、植物はリュウキュウアイ、山藍とし、染料にしたものは 琉球藍または泥藍、藍玉と文脈によって言い替えた。

[2] 本部町史編集委員会『本部町史 通史編 上』本部町, 1994 参考

[3] 嘉陽礼文・太田守史編 , 2022『太田康子（太田守福の妻）聞き書き 戦前・戦中・戦後の沖縄を生きて一九十年来をかえりみる』という本を自費出版され、その中で記されたことへの質問

[4] クールかグールか何度か尋ねたが不明。ちなみにグールは染物芋、八重山地方でよく使われる。

[5] 同載の年表は、当館主任学芸員の崎原恭子氏が中心になり作成した。